

# 学年通信

岡山操山高等学校2年次生  
生徒の皆さんへ  
そして保護者の皆様へ

2009.10.13.

## 【保護者説明会・科目選択】(保護者の皆様へ)

先月26日(土)に行いました保護者説明会には、御多忙にもかかわらずたくさんのお参加を頂き有り難うございました(参加131名)。現在3年次の科目選択について予備調査を出して頂いた段階で、必要に応じてHR担任との面接を実施しています。**正式調査の切り切りは11月6日(金)で、保護者印が必要です。**御家庭で十分にお話し合いの上、提出して下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。

## 【第2回実力テスト】

9月30日・10月1日に行われた実力テストの成績度数分布は裏面の通りです。今回から初めて5教科実施となりました。今後は外部模試も5教科です。勉強量を増やさないと対応できませんが、大変だからと諦めるのではなく、「実力テストは実力で受けるのだ」など言わず)、機会を捉えて復習(特に過去のテストの見直しが効率的)をしましょう。地道な努力が、後で効いてきます。

## 【10月～11月の予定】

10月15日(木)～20日(火)第3回学力テスト

10月20日(火)人権映画視聴(12:30～14:20)

映画「ウイニング・パス」(保護者の方もどうぞ)

24日(土)土曜活用

30日(金)中高教育実践発表会(授業は5限まで。6組物理選択者のみ6限)

31日(土)進研模試

11月1日(日)進研模試

2日(月)PTA母の会研修旅行

7日(土)土曜活用

14日(土)～15日(日)東大8校合宿(希望者)

19日(木)秋季球技大会(終日、桃太郎アリーナ)

28日(土)土曜活用

## 【「存在が～する」ということ】

今から16年前、朝日新聞の日曜版に心理学者の河合隼雄さんが「おはなし おはなし」という連載をされていました。1993年の2月21日付けで、当時亡くなられたばかりだった井筒俊彦氏が書いていたこととして、河合さんが紹介されたのが、次の文章です。

われわれは普通ものごとを区別して認識する。あれは象だ。これは花だ。私は河合だと。そして「花が存在する」という表現をする。しかし意識をずうっと深めてゆくと、それらの境界がだんだんと弱くなり融合してゆく。そして、一番底までゆけば「存在」としか呼びぶようのないような状態になる。そのような「存在」が、通常の世界には、花とか石とか、はっきりしりしたものとして顕在している。したがって、ほんとうは「存在が花している」と言うべきである。こういう考え方もあると。

\*井筒俊彦(1914～1993)：言語学者、イラスラーム学者、東洋思想研究者。

ギリシア哲学、イラスラーム学者、東洋思想研究者。

\*河合隼雄(1928～2007)：心理学者・心理療法家。元文化庁長官。専門は分析心理学、臨床心理学、日本文化論。日本におけるユング心理学の第一人者と考えられる。箱庭療法を日本へ初めて導入し、日本で普及させた。

人は、自分を持ってあます時があります。なぜかイライラしてしまふ、なぜか朝から落ち込んで、他人の何気ない言動が気になる、そんな自分を嫌だと思ふ時があります。特に思春期・青年期にはそうです。そういう時はこう考えてみて欲しいのです。「存在が〇〇をしている(〇〇は自分の名前)。これも結構大変なんだよね。」と。

〇〇はペルソナ(外的な側面)に過ぎないと考えて、ペルソナを自分という「存在」から少し遠ざけて客観視する。そう考えれば展望が開ける時があります。

\* \* \*

私が河合さんの文章と出会ったのは20代の終わりのことですが、ここからは、それより5年前、働き始めた年の話です。

大学4年で受けた教員採用試験に落ちた私は、1年契約の常勤講師として教壇に立ちました。最初に勤めた学校は、1学年が11クラス510名。学年230名の学校を卒業した私にはびっくりするような大規模校。社会人1年目の緊張もあったのか、5月に目の病気を患って手術し、1ヶ月入院。7月の採用試験は当然のごとく不合格。バテバテの1年目でした。

なかなか思い通りにならない、そんな晩秋のある土曜日(当時はまだ土曜日に4限まで授業がありました)。すっかり自信を失っていたのに、なぜかちよっとした実験を思いついたので。

教頭さん、教務主任の先生、そして私の3人しかいない夕暮れ時の職員室。教週間前から、自分の書く文字の「大きさ」が気になっていた私は、尊敬するお二人の先生に近い場所、文字を書いてみようと思立ちます。

あまり器用ではない私は、子供の頃から小さい文字を書くことが苦手だったので、その頃、なぜか逆に大きな文字が書けず、「それは気持ちさが萎縮している表れではないか」と考えていたのです。苦手とする人の前で堂々とした文字が書けないのは当然かも知れませんが、しかし、好意的に思っている人の前でさえ、きちんとした文字が書けないのならば重症だと考え、実験を思い立ったのです。

できるだけお二人に近いところで、翌週の出張のための書類を書きました。書類の最初に自分の名前を書くのですが、枠の大きさよりもはるかに小さな文字しか書けません。書き損じたフリをしてもう1枚もらって書きました。やはり小さな文字しか書けません。今度こそ枠一杯に書こうと思って、もう1枚。指を思い切り動かそうとしましたが、やっぱり小さくしか書けません。さすがに、それ以上は紙がもつたいなく、何度も仕損じたフリをするのも無理があり、小さな字のまま書き通しましたが、これで悟りました。「こりゃあ、かなり自信をなくしてるなあ」と。

\* \* \*

その時はこれ以上のことはしませんでしたし、特に何も考えなかったような気がします。でも、後から考えると、このときの私（という「存在」）は萎縮したペルソナを、客観的に見ていたのです。「ちょっと試してみよう」と思った時に、既に自分が抱えている問題に気づいていたのです。今回書きたかったことは、そういうことです。2年生の2学期というのは、なかなか多忙な時期です。何かに引っかけかかっているような時は、頭を冷やして、ちょっとだけ自分のペルソナ（表面的な姿・行動・感情）から距離を置いてみる。何が問題なのか分かれば、その問題の解決は近いと思います。

※今月の詩は まど・みちお「ぼくがここに」と度数分布表はHP版では割愛